

きん稲

泉鏡花作

全一章

「おもてに案内がある、案内とは誰そ。――」
洒落て抜からない男だと、「いや、それがして
ござる。」とでも言ひさうな處だが、何うした用
事か知らないが、眞晝間、檜物町の藝妓家を訪ねた
のが――聞かない振をなさい――實は
私……だから苦笑ひをして突立つた。

取次ぎに出たのは渾名を河童と云ふ、雛妓から一
本に成りたてのお侠で、自分の好きだが、誰かの註
文だか、藤間へ通ふ隙に、大藏流を嚙つて、清水、
伯母ヶ酒どころ二三番覺えたのが、（ざんざと鳴
るはの、よしの葉のよい女郎、）……と、姉
さんの名が芳乃だから、一寸叱言が出さうだが、出
ると、（その、女郎ではござんせんよう。）と
唇を翻しさうな狂言謠で、小舞の稽古をやつて居た
處へ、「今日は、」が打撞つた次第である。

「これは槓どの、あなたなれば、案内におよびませうか、つゝとお通りはなされいで。」と圓い目をして額で笑つて、素の眞顔で、「何う……ぞ。」「と言ふ。「何うぞはいゝが、内なのかい。」「然やうでござる、頼うだものは、今日山一つあなたへ寺詣をいたしてござる。」「留守か。」「いゝえ、――知つてゝよ。すぐ歸るわ。……然う言つて出掛けたのよ、ぢきですわ。取つてくれた火鉢ほどの陽氣ではなかつたが、引寄せて煙草を吹かして、「河童子、あひかはらず化けるなあ。」「知らなくつてよ。」「皆は?」「えゝ、お稽古だの、お湯だの。」「これは。」「と私は小指を出した。

藝妓家で、内證で聞くのに小指はをかしい。が、此はもう妙齡に成つた――芳乃の實の娘がある……姉さんがきちやうめんな處へ、また内氣で、一人では西河岸の地藏様の縁日にも出ないほどだと、豫て聞く……まだ見た事のないのであるが、然うした堅氣だけに此のおとづれば、何となく、其の娘に顔を見られるやうで、きまりの悪

「おぼへ。――昨夜だつけ。――四五人で
一座の時、何が緒だつたか、深川の「きん稻」
の話が出て、一度是非と姉さんが言ふのに、友だち
は皆品行方正だし、いそがしいから、私が其の選に
當つて、で、今日の約束をしたのであつたが、――
河童は、眞仰向に二階を見上げて、「おごうは
此でござる。」と忽ち俯向いて手で針の運びの眞
似をする。「感心だなあ、ちよ見習へよ。」
「さうは化け切れなくつてよ。」「此奴。」
「おほ。」とついと立つ。――いさゝか通
力があるくらゐ敏捷いから、奥がかなり深い所へ、
静にあいた格子の音。私には一寸分らなかつたのを
――すぐ聞きつけて出迎へた。姐さんが歸つた
のである。「入つしやい。――向うの角を曲り
ますと、あなたが横町へお入んなさるのを遠くから
見ましたんですよ。」急いだから、軽い上氣。
火鉢の横へ膝をついたのが、次の室に茶を淹れて入
る河童の方へ。――澄した目遣ひながら、
何だか氣がさしたやうに瞳を返して、伏目に指を反
して、たけなが指の白く撓ふのを一寸見て、片手で
縞大島の羽織の襟を扱いて、「すぐお供をします

から。「と障子のしまつた縁の傍の、鏡臺の方へ、斜に肩を反して横向に成つた様子は、かう何だか悠揚として、如何なる時でも、しつとり落着のある座敷のとりなりとは急に違つて、三十を越した姉さんにも、娘の頃が偲ばれた。こんな男の入込む家風でないのが察しられる。……馴れないから河童に對して、やゝ含羞んだものらしい。と、座にもよく着かないで、「一寸。」と次の室へ、それなりすぐ立つて、茶を出して引退る河童の背中へ、恁りかゝるやうにした姿。脊がすりりとして居るから、奴が化けて出た願の上へ、袖の柳が靡いたやうで、「萬年堂へ行つて、ね、あゝ……。急ぐんだよ。」
よ。「構つちやあ困ります、それに、とに角一杯と言ふ處だから、甘いものは……。」「いつかおいしいとお言ひなすつた、鯨羊羹があれば可うございませう。――少し時節が過ぎましたから。いゝえ、お相伴に……。今日は、佛様にも。」
と、箆笥の前へスツと行く。

承塵の壁に、引伸しの寫眞が金の額縁で掛つて居る。……年配は……。だが、父さんにし

ては當世過ぎる。勿論、亡く成つたと聞く旦那である。工面はわるくても、こゝは作者だ。書く方の融通はつく。でつぶり肥つて、膏切つたとやりたいが、然うは行かないから黙つて置く。第一、私より年紀が少い。――「……だね。」と片膝を立て、見るやうに見ないやうに、其方の頬邊へ平手を當てると、姉さんは、はめ込の對の箆笥に並んだ衣桁に手を掛け、肩で脱ぎがまへの羽織の紐をいぢりさまに、ほんのりと睨を染めて、「姉の日はですよ。」横を向いて、ありがたい。」とうっかり言つて、きよつとして茶を飲んで。「お寺は？」「深川なんですよ。」「それだと二さいに成るね。」「いゝえ、結構です。……ひどい埃です。」と脱いだのを衣桁に掛けて、「一寸、失禮を、撫つけますから。」で、向うむきに鏡臺の蔽を拂つた。早い處、膝だけついて少しうかした、帯腰がきりゝとする。八口がしまつて、内では何處か所帯じみて見える處が、藝妓と言ふより、年増のお師匠さんの風采がある。「六すが」と書いた札の、横三子の柱に掛つたのは、何とか店とか、町とかの名とりだらうが、長唄より、

其の、踊のお師匠さんの風采がある。

かた／＼かたと土間が鳴つて、

「急いでござる・・・たのうだ人。」と言

ひかけて、わるく黙つて、急に寂然して、茶棚の鉢

を取出す音。「あつたかい。」「あ・・・

・」「いま行くから。」で羽織を小濱の黒の紋

に着換へて、其茶の間へ出て、「然う・・・

生憎だつたね・・・あなた、お目に掛けますば

かり。」これは頂かないと、わけ知りの友だちに

叱られる。私は鳥羽玉を半分食べた。――あゝ

甘い。

姐さんは木皿に取つて、佛壇に備へた。遠慮では

あるまい、額の中のは酒だらう。一寸拝んで、その

綺麗な指に、鏡臺の抽斗から、つき膝で、紅玉の指

環を取つて通した。「お待遠様でございました。」

「行つていらつしやい。」「たのむよ、留守

を。」「其の段な、ちつともおきづかひなされま

すな。」ドボンといふやうに奥へ飛込む。まだ戸

を出ない前である。

戸外の日は眩しかつた。―― 姐さんは町内を
抜けるまでは涼傘をささないで、すこし退つてあと
についた。それなのに、眩しいのに、私は何故か柳
の影を行くやうな気がした。そして、其の影に、半
襟と背負上げの色が淡く映つて、しつとりと肩にかゝ
る思がして、胸に何となく小唄がきこえた。

たゞし此の邊兩側は、日中取澄して、静まりかへ
つて、稽古三味線の音も漏さない。

電車は洲崎行を呉服橋で待つた。が、見る／＼う
ちに人間の埃と成つて、……。砂煙に動揺むば
かりで、乗れさうな様子はない。

その人垣に、惱んだ卵の花のやうなのが少し寄つ
て、「自動車にしませうか。」「成程。」「私
はぎくりと胸に應へた。藝妓を誘ふのに自動車を心
得ないのは不覺であつた。」「何處か此處等に。」

「知つて居ます。」「すぐ右側の横町を入つた
處に組立てたやうな構の店がある。姐さんが其處へ
立つと、艶かな黒塗のが、ぐうつと土間を動いて、

勾配を下りるやうに、傾いてづんと据る。

「永代を眞直に――」何うかすると、何處かの内室には見えても、藝妓らしくはないのだから、其の段は仔細ない。が、あの、雑沓の中である。馴れない私は、唯はら／＼して殆ど口も利けなかつた。驚いた事には、激しい人ごみは八幡様の前まで續く。

――覚えて近い頃までは、もう永代を越すと、汐時でなければ、いかに込んでも入江に水鳥の群れたやうな景色だつたものである。「その邊、その邊だよ。」姐さんがちゃんと用意した祝儀を渡した。「いくらい。」「いゝえ。」とおさへて、

「檜木の町の……分りましたか。」

「附添が、存じて居ります。」自動車の揺据つたのが、またけたましく湧上るやうな音を立て、居る傍へ姐さんは靜に立つた。その爾く靜なるにつけて、私は少々心が焦つた。汐見橋――を前にして、細々とした露地を二つ三つ覗かないと、裏通りに、殆ど水と水に圍まれた……また其が風情の、きん稻の場所が、澄して、ついでは知れにくかつたからである。「一寸、お待ちなさいよ。」

前へ、しるべの露地を見ようとして出かゝつた時である。自動車はまだけたましく鳴つて居る。ト私たちたちが立つた空を、片側なんぞは二階家までもない、屋根上の低い處を、赤い底をスツと翻して、一機の飛行機が、その腹に、凡そ自動車ぐるみ前後の往來、八九十人一息に呑んで泳ぐ様に通つた。不思議に音がしない。同時に水の町も、青い空も、颯と雲と煙とで灰色に暗くなつた。私はトボンとした。不意に目の上を泳いだ赤い船である、中から落された様でもあり、あはや吸上げられさうでもある。――

驚いたと言ふよりも押魂消たと言ふ方が顔色にも似合つて可い。と思ふ／＼、海手南の天へ斜に遠く霞んで行く。振返ると涼傘をついて一人路傍にゐんだ芳乃の姿が、武藏野の果のあしの一本に似て寂しく見えた。――何故だらう。……「八幡様から先方は初めてです。」そのくらゐな話は車の上でした。少くとも、此の時は、たゞ導かれなければ成らない私に一寸離れた間の心細さであらうも知れない。が、私は又、うつかりすると、その、空の船が、水際の立つた、あの棲から、根こぎに宙へ引攪つて行きさうな氣がしたのである。否、唯姐さ

んばかりではない。此の不意に顯れた空を漕ぐ赤い船は、江戸のむかしの面影を半ば其のまゝの、もとの深川を、包んで飛んだやうな氣がした。

雛妓の太郎冠者などは實はどうでも可い。私は此の心を言ひたいのである。・・・また不思議に、何う云ふ氣、何の考もなしに、其の日も、それから後、此の飛行機の事については、一言も話の觸れなかつたのも、思へば希有である。姐さんも言はなければ、私も言はない、言はうと思つても逢ふと、もに忘れた。

何しろ、妙に、これがために心持が顛倒した。きん稲は材木堀に浮いて、座敷が中二階のやうに水に臨む。水から水、水から水へ入込んだ内堀だから、浸した材木は、時に微に勘いても、筏も漕がなければ船は來ない。前後にも、此の時とも、五六たびは行つたであらうが、中で唯一度、いなせな半纏着が、角材をぐる／＼と、さゞなみに乗つたのを見たばかりである。其の棹は水と、もに眞青であつた。――と言ふ家なのであるから、窓を隔て、小縁を越し、

欄干に水を挟んで、こゝに見る美人の風情は類がない。――よそで見る美人は、たとへば錦繪のやうであるとする……こゝで見るのは、錦繪が活きるのである。

めづらしく、國貞の繪そのまゝな、姐さんと、こゝに二時を相對したかつたのが、心持であつた。――第一、遠出の謝儀なしに、誘き出して、深切ではあるが、高價くはない御馳走で、いま時錦繪に魂など云ふ……然うした不了簡だから打壊れたのに無理はない。

空の船は、繪の魂を人間に返した。従つて浮世離れた水の寮に於ける其の日の話も、偏に物價高値の共鳴であつたに過ぎない。――水馬を視めて、蛙を聞いた。

見得のない姐さんは、折を提げた。

「あら、お珍しい。」汐見橋へ出る、電車の處で、いま其處へ下りた圖髻の若いのが聲を掛けた。

私は微酔の勢で、つか／＼と寄つた。「まあ、ど

ちらへ。「儲口を捜して居るんだよ。」
「あんなことを言つて——お寄んなさいな。」
「いや、いづれ。」——「意気なおかみさん
ですね、どちら？……」
「暮迫る人ごみの寄せつ返しつ亂るゝ中で、姐さんが聞いた。」
「引手茶屋の——あれは娘だよ。」
「場所ですわね。」
「と感心したやうに言つた切。で、御遠慮なく。」
「とか何とか一寸こだはりがあると寸法はいゝのだが、姐さんのは、唯當日の夕刊記事を一寸覗いたと言ふ様子である。」
——「安心をなさい、きん稻の場面に色氣のない事は此で知れよう。」

その年十月の下旬である。薄ら寒いから羽織を引掛けて、まだあかるかつたが、暮方の所在なさに、戸外へ出た——今日は、おとなりの番かな。ちき辻の角の夜警小屋の張出しを覗いて、ぼんやりと立つと、ふと人通の途絶えた町を、麹町の大通の方から——もう其處に近く来た、黒犬が一疋ちよろ／＼とうしろに、夕霧の薄い中に、ほの白い瓜核顔と、霧に包まれたやうな姿を見た。私はあつと言

つた、「おすがさん。」思はず實の名を呼んで
衝と寄つた。――大地震、大火のうちに、はじ
めて逢つた其の人であつた。ダイヤも紅玉もなしに、
めんねるの單衣に、琉球がすりの中古なのを、胸を
細りと、瘦せて居た。

顔を今見合せたトタンである。飛行機が一臺、小
さく一つ星の空を飛んだ。辻の小屋に木の葉が落ち
た。

私はゾツとした。……・焼野原でなしに、遠
い水から雲を傳つて、空から下りて來たもののやう
に見えたからである。

其の晩、うちの茶の間で話が出たが、汐見橋の飛
行機を、芳乃は何も知らなかつた。

日ならず……・九九九會のお友だちと、一同
が座敷で逢つた時、ほかのは、いろ／＼の色に、衣
ものに、苦心をしたのに、此の人は、おなじ姿で、
黒繻子の帯で、目まじろぎもせず、端正として居た。

御鼻^{ごひ}眞^{いき}に

—
—

【完】